

松屋筆記

卷廿四

37

45
1397
8



15
1397
8

高田早苗
昭和十四年三月八日

松屋筆記

廿四



るい十二番

Die Wissenschaften der Naturgeschichte
 in der Provinz von Sibirien
 von dem Herrn Professor Dr. Johann
 Friedrich Zinnberg
 in der Universität zu Halle
 1794
 In Halle bey Carl Neuberger Buchhändler
 1794

松屋筆記考目録

- (一) 概考
- (二) 一解
- (三) 常用考
- (四) 一付考
- (五) 一付考
- (六) 尚屋
- (七) 柿餅
- (八) 三考
- (九) 考

- ⑩ あしな あしな
- ⑨ ちまき 詞
- ⑧ 太元法
- ⑦ 金毘羅
- ⑥ 深沙王
- ⑤ 虫衣。歡喜團。名子。
- ④ 愛敬の法
- ③ 銅杓。花燈。
- ② づらり
- ① みぎ

- ⑩ 硯の名義
- ⑨ ひげ
- ⑧ 善知鳥。みね
- ⑦ 白柏子
- ⑥ 白杖
- ⑤ ゴツクビと云ふ斧 熟根
- ④ 目代
- ③ 娘入の門火
- ② 名がしるま
- ① 字の異射者字

卅 晦日山針
廿一 ばまのあがれ。はぐれ。かたれ
時。あまのあがれ。あまのあがれ時。

卅二 日のくれ
づら。あつら。海ぼよ。はりら
のぼら。田づら

卅三 月見の造人びねるど

卅四 田登

卅五 暮の候

卅六 弘法大師意まつり

卅七 国飲

卅八 ガシマウキ

卅九 大初豆お豆。大崎のれ

四十 ヒヨツト

四一 人形のあがれ。あつら。畜生

四二 踏む

四三 籍役

四四 女のつらう

四五 うちけう。あ。ひがらしく

松屋筆記卷四

東都高田興清漢儒稿

一曰 櫻もえ

櫻衣

曾根好忠のちのしとて遊の舟人
うらをえりやうりきぬまのそり
とよ歌も 諸注の 櫻を絶つことん
根と申しとよのしとて 日教のしん
しきつがとて 櫻をせみ 櫻のそ
さよとよのしとて 櫻のそ
諸絶え 櫻もつ 櫻のそ

絶つるやしの續古今籍中小野
以方のあられはゆふゆのうら
とよまづゆきをかをうら
順正院の集
梶緒とよまづゆふゆのうら
の流子こころれてまある右の二音夫木籍
ナまももえん

二 一 何

今の世の長持何樽一荷たよ一
荷をひまゆりゆりゆり原氏

明石 向月抄四子所記ゆりあやうけ
とんえんこいゆ衣櫃敷口何たよ一
をもひまゆりゆり

三 節用集

節用集の南都の宗二の撰 宗
二、西番人の孫え 饅頭屋なり
ういせまこいゆ 饅頭屋節用とよ
文亀年中の寫本ゆ吾友中山信
名秘蔵せり 屏書一箇とよ
今の沙汰あり 今世を行るも

半截の少本あり。又半截の少本あり。狩右望之の蔵本あり。比一関や。小の度長二年。武川三志林在る。校合や。活本の大本あり。小本と順次。ふり所あり。實に同本。又半截本あり。行書子あり。平假名と附て。自子分。毫字様。澄疑。廿四節。并漏刻。世々此活本。板本あり。寛永の此の刊。又二行。節用集と。刊。号。一。二。三。行の二。三。五。三。

たす板本あり。大板と小本と。二種あり。以上目録。寛永以後の板本。及今。の所見。存あり。六種。

① 一回。つけたり。并。て。

新韻集の耗。一。云々。節用集の耗。一。批。日。云々。欽明紀の折。一。云々。一。云々。け。一。云々。の所見。あり。少。一。云々。而。一。云々。和名。一。云々。阿。一。云々。一。云々。

は外つぐし 比衣の反 比衣の反つぐし
比衣割を 比衣の反 比衣の反つぐし
又片木 比衣の反 比衣の反つぐし
約こ 比衣の反 比衣の反つぐし
つぐし 比衣の反 比衣の反つぐし
の 比衣の反 比衣の反つぐし
と 比衣の反 比衣の反つぐし
者 比衣の反 比衣の反つぐし
と 比衣の反 比衣の反つぐし
例 比衣の反 比衣の反つぐし

今の中 比衣の反 比衣の反つぐし
テ 比衣の反 比衣の反つぐし
名 比衣の反 比衣の反つぐし
波 比衣の反 比衣の反つぐし
子 比衣の反 比衣の反つぐし
美 比衣の反 比衣の反つぐし
同 比衣の反 比衣の反つぐし

同書 比衣の反 比衣の反つぐし
今三都の 比衣の反 比衣の反つぐし
商人の 比衣の反 比衣の反つぐし
同 比衣の反 比衣の反つぐし
の 比衣の反 比衣の反つぐし
侍 比衣の反 比衣の反つぐし
馬 比衣の反 比衣の反つぐし
夫 比衣の反 比衣の反つぐし
役 比衣の反 比衣の反つぐし
者 比衣の反 比衣の反つぐし
の 比衣の反 比衣の反つぐし
宿 比衣の反 比衣の反つぐし
行 比衣の反 比衣の反つぐし
り 比衣の反 比衣の反つぐし
と 比衣の反 比衣の反つぐし
今 比衣の反 比衣の反つぐし

⑦ 柳餅

常用食が鄙に柳餅ありいぬち多
子何月く己る也今七言のそり
た餅はこゝ堅餅の類とや

⑧ ちまや

ちまやとちまやの事を知る影の
字比事よりみる細野群蔵より
平家物語長門本序平盛氣記理と
ちまやちまやのちまやのちまや
子を敬あり柳氏物語花子まをく

一ちまやの事とちまやの事と一也

⑨ ちまや

昔も物語子房腹いふちまやと
と子房のちまやとちまやを
ちまやこはちまやと色を
のちまやとちまやとちまやと
と川のを例に万世に天地に安来
都之れとちまやを減りよの字比を
つらん

⑩ あひま

古今無上信物なり

ありありしく物なりこのまじり神

とる月とて人ありてなる所の歌後

孩籍のるも載りて契神云註あり

ありていれありていれありていれ

とる月とて人ありてなる所の歌後

相の色と袖と有とたうりありていれ

とる月とて人ありてなる所の歌後

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

幸大夫集子

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

ありていれありていれありていれ

あまの相似后とる味はるすとら育は

①大元帥

大元帥此世三
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥

大元帥

大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥

②大元法

大元法の子に物もあふるとして
物もあふるとして
物もあふるとして
物もあふるとして
物もあふるとして
物もあふるとして
物もあふるとして
物もあふるとして

大元帥大元帥

大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥

大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥

大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥

大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥

大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥

大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥
大元帥大元帥

破七分象惡馳名魔道廢敬
才大元帥之力今見唐朝皆依此
為治國之寶勝敵之要

目金毘羅

沙門常曉請來目錄子大聖千臂
千頭金毗羅童子像一軀。右金
毗羅童子者此釋迦之化現也經
云佛在歡喜園中為諸衆生
說法是時外道波旬起諸惡障
左邊衆生受大苦惱時如來

定應自身作金毗羅童子調伏
外道諸魔於惡世中饒益衆
生此法也尤鎮國利物之寶法力
之奇特也不思議此像每法儀持
明者所祕本在移來見請來如件

④ 深沙王

同書子深沙神王像一軀在唐代
玄宗三歲歲遠涉五天感塔此神
此是北方多門天王化身也

宝園隨筆

五 出衣。歡喜園。合子。

大使咒法。徑秘意儀軌取阿伽木。

如一指白檀木即長越作臂天。

者出衣。頭戴七寶冠。右手把戴。

芥又下手把歡喜園。盤左手執。

梓下手執牙。其頭如象頭。左

牙折以蒲繞取歡喜園。勢頂底

香檀珠。白繩。右脇上。角絡披

脚踏。在山上取銀合子。盛於指

香燈。飲食。文中。出衣。と云

下卷の事。下巻の事。下巻の事。

出の事。衣の事。あり。歡喜園。合子の

聖天の所。因の事。あり。真法。藉記。と云

六 蓮敬の法

同經。若欲左一切。後敬者。取牛

黃咒。一石。過。然後取牛。黃。照額上

印。皆受敬。其咒。女子。戴。り

庵。唐伽。頌。唯。唯。訶。斜。洋。の。九。字。也

又法。欲。左。一切。蓮敬者。取白蓮花

線。柱。牛。蘇。然。心。就。像。前。供。養。取

咒。是。咒。一。百。八。遍。然。後。點。眼。中。所。見

皆愛敬ヒキする如く像ハ聖天の像ハいふ
愛敬の法ハおれハ力カ富貴法増戲得
勝法ハいふハあるハの法あり

① 銅杓。花燈。

同燈子取銅杓酌油ハするハ花燈
一具或四面安ハ之ハ云々

② ばらハ一

今俗子黒色の物ハツグハとハりハ思
こりハ口ハキハしハ字鏡ハ毎ハ二ハのハ巻ハ山ハ部ハ子
曇ハ雲ハ懸ハ懸ハはハのハ字ハハハクハムハとハ云々

ワシハノハツハカハムハヅハクハロハシハとハよハみハとハ云々
とハ云々

③ しみハとハ云々

山後ハ城ハモハサハキハとハ懸ハはハもハ山ハのハ岨ハ子
幕ハつハよりハさハるハれハとハ来ハしハ字鏡ハ毎ハ子
二ハのハ巻ハ山ハ部ハ子ハ岨ハをハこハサハキハとハ云々
とハ云々
あハらハびハ即ハ持ハたハいハ所ハ小ハとハ城ハをハとハ云々
記ハしハとハ云々

④ 硯ハのハ名ハ義ハ

政事家略
廿九の巻
山後
山後

硯いたきりの略言し字鏡集の巻右
部子硯硯同スりすスミスリと訓
ころん起しし

(廿) ひびく

大平記はど子礬もヒスラツとなり
字鏡集の巻右部子礬もヒスラツ
とヒスラクと訓さもいヒスラクハウスラ
グ義なるとゆめしし

(廿三) ういふ

薄塩草十の巻鳥部也ひう廿三子

淡草

子成物也調の雨の筆の上子からる心
さりやはいののき大非字一勅使
わてうこよやいことよき成とりん
三角抽とよ極子備二神侯子有る
とこいはるとるまの景筆成とるこ
其故いはれの中子子成うみんかく
したる成母のこよまね成とる
うこふくとまづいちけうといん
といはる成とるこ其時母をり
うめいはる成とつきある成とる成候

雨のどよみ血をえさる方其泪より
身の揺るぶるを多しそのかきけさるし
きく新撰歌枕四の巻陸奥平都瀆
の多し西行

みせのくのあつちうくそ替るは
けちのいしゆこそその白川右この
そめは流とよそちみくよちはりこと
よそよの侍をのけ流のいぢるあやか
らして子けくみおけら母のこゝろ
お物こそうよくとらげちいこ

とそとちとるはさそきこやまの時母
きよいたくそあやこいぢく付あ
りまいたくし其泪の血のこまに紅き
雨のこゝろさあ歌ま

みとまのよ川の雨の血をむはるか
なまきのいさかちいこよまらり
人は血のかけりつもとそん付の
けり血のからりとみあま地さる

こより歌ま
みけりよ川の雨の血のこまに紅き

この部 ちひさしめなるよかろり 云々
廻國雜記 武蔵の河越大井 一
た少坂すくらゆめなるなるはさるしこ
るあまうこふ坂ととりあえしとるこ
くふ坂とまじりしりまじり
ちひさしめなるよかろり 云々 **類聚**
百五の巻也部 ちひさしめなるのあま
万

み地ゆふ田の雨のまれとまき
の歌万世の雨のまれとまき
すま木

こまのあまの雨のまれとまき
まのあまの雨のまれとまき
うらいたんりしとまき **陸奥**
所寄 陸奥子 夫木

こまのあまの雨のまれとまき
子地ゆふ田の雨のまれとまき

松葉 松葉の巻 菅部子 夫木
みちのあまの雨のまれとまき
あまのあまの雨のまれとまき
松葉の巻 陸奥子 所寄 夫木
松葉の巻 陸奥子 所寄 夫木

吟とやゆふし 洗身子ヨクト
云フ鳥奥州平都ノ濱ニテリ母鳥
砂ノ中ニ子ヲモ砂ニカクシオキテ母鳥餌
ラシキ来テウクテトモハ見ヤスカクト答
テ出テ餌ヲ小中トゾ楸人が母鳥ノ
声ヲ子テウクトモハ見ヤスカクト答テ
出ルヲ捕ルトゾ見テ捕ラレバ母鳥奥
州ヲナカス其血人ノ身ニカレバワロト
テ衣笠ヲウケテ見テトト也定家卿ノ
歌 木木抄

ミチケクノツトノ濱花ヲフドリナクナル
声ハウクテヤスカク遠曲拾要抄ニウク
ハ雁ノ子也ト云ク又一説ラアケテ或書
ニ云其形方目ニ似テ味脚モ方目ニ
似テ頭ハ鳥見ノ如シ嘴ノト云肉角アリ
赤色也云々 按眉ノ子也ト云ハ誤ナリ
或書ニ云ト云説コシタクノ頭ヲ切テ
ホシカハカシタルヲ見シト雁トハ産ヒク
云々毛色ハウス黒シ嘴ノ色ハ赤カラズ
白クシテウス黒シ乾クニ赤色サレ

頸大サ鳥ヨリ小サシ目ノワキノ細長キ
毛ノ久サチリ肉ノ角ニアラズカタシ
倭 倭三才面會四十一の老水鳥類部
子善知鳥正字未詳俗云野止好
按善知鳥鷓鴣鳥形色似鷓鴣而南
黄粒勾脚淡赤色奥州平土濱有
之特輕津輕安海浦也多云奥羽
龍送聞老志十三の老津輕郡部安
海村在外濱新峰山畔此地有鳥
産子于沙上之捕其子則悲鳴殊

鳥之人曰沙鳥或稱善知鳥或方
鳥鷓鴣老木集

くちのくのぬのたぬるいふさるさる

みはけり小川の雨のいさふさるさる だ計
さる初供りいさる 東遊雜記 九の
老二月廿五日青森子止名はけり
後さるさる 津輕一の津輕
市中この軒好鳥の地とあるさる
橋のすゝめあひ若いさるさる

形子神と云うらんをこの家居もよく
中一云いひたる善知鳥の社と称せり
社氏乃巡見而こけり跡い奇るま
やうとありし或は意たると海陽
をまじりて世とる四郎ちるまの
と云ひたりしを善知鳥といふもの
と云ふよりさうさうありし
若木の麓相の小社を社家別南の
家をもいひつゝさうさうありし善知
鳥のをいひて松州麓嶋の明神といふ社

若木の昔時け地を説きやとよ
のりしし信子家像明神の社あり
所歎主津輕侯の所建立の社といふ
のうらな麓相のりしを名をすしと
大連のいふ百聞一見を不及とせし
かゝる子の社身あるもの善知鳥の
説りしとよりしなりし和歌者流
好子の説りしと増もなき論なり
その子んをいふさうさうありし
つ

みらのこのめの後たる呼子なるを
天子きい和哥三鳥の他はんは西え
の呼子きしと稱せざるあつ母きあを
多此呼をな此はな呼子きしと稱れ
新設設をなすもあま子此呼を
りもしとをせざるあつ母きあを
多きしとあつとすか鶺鴒鳥やん
子しふ鶺鴒も云或いんとも云鶺鴒
をきしとあつや何しとあつ子此呼を
此きしとあつと稱れざるあつと

みやき大平記の呼子なるを
えしうとすの呼声やスカタにきき
おきあをききうとすといはれ鶺鴒の聲
の中よりヤスカタと聞き其声は相
圖は母ききをききりりて飼をき
かき和漢三鳥圖卷に鶺鴒の属を
水鳥の部と記しり鶺鴒子と
よきりひきりしとあつ伊勢国の海濱
みはしきりあつあつ初のゆきあつと
みはしきりあつあつ初のゆきあつと

△結崎世阿
孫世阿
産長
こと
の年の
の心

神保とくしとあしつゝまこころのみのあめ廣
たす字のあまきとよみーいのの廣ま
てん目と及な馬代たしと世地祝
よみー歌こまゝ百番流記善知鳥
陸奥のそとのちまれのよあまら
なるまをいこゝあやびつゝいまこ
こー七響りーあやまら今こゝま
房のあまこやいこゝのちのち
やなるしこころーはこゝのまのこ
まこゝまを歌おあまらちよ

まこゝの娘はまきなりとあまらつこや
まこゝんとひまらま柳こよや
かめとこゝままらうはりこゝ
の中まあまらやなけまのあまら
まら祝は根の本まの本まらま
地まらまらうまらまら
平砂まらまらうまらまら
祝うまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら

洞床のやうなと 帯表や
此うがけさうこのたき地も
うきを公之つらういふあまふ
やうかふる家の洞子月も
かふるいふみらのもりのか
見えいふふちひさしとと
途まへに化鳥とやうき
吾抄善知鳥子

ミチノクノツトノ漁花コフコ鳥
ウラフハレズヤスカ夫在名手云々
秘蔵

抄下鳥部子業手

かふるいふみらのもりのか
見えいふふちひさしとと
途まへに化鳥とやうき
吾抄善知鳥子
島をいふこまむしれきよ
地りあしけいふみら海の漁の
洲れきよさ地ゆりてあはるも
み地人のとうるあけいふ
あふるみこいふあまふ
さすいふみこいふあまふ

△松島の方言
2つにわかれ
蛸島の方言
うとつがとい
り

おのゝもゑもいれさる 狐師の将獲
雛鳥といふとも 厚作氏 賢田うとふ
古名すれさるまふ又ちいふのさるも
み視もくよらふみ秋ちいふこと
ともしりま秋秋の鳥のよく 常の
そは淡黄色も 雲れの上なる
あう眼の上と 眼尾の白毛生し 尾
牛下うく足子距 前のこ三爪
踏あり く 中 の 人 の 為 を 捕
るもい友鳥ちいふうへ 飛てあをを地

とあもー 二 地 因 故 う ん と
よんはつて と 其 と 所 場 さ る も
地えり子 吻よりの 鳥 の 聲 は あ ら な い
と津地 は う ん は な い と 異 名
分類 三 の 鳥 鳥 子 善 知 鳥 秋 蔵 抄
みすれさる
まのゝもゑもいれさる 今 あ り と
えんいれさる 其 名 も あ ら ば 好 折 雛 也
さういふ ま い ふ ま の え ん い れ さ る も く
ともしり な れ さ る 地 の 即 字 も え り さ
地あう お の よ さ る と よ さ る れ い し

つゝあの子はたまたまのみまよひぬき
とらふ鳥のそとあふらんしきさ
いづれに **書** 鏡十の巻 子 松
分濱と稱部間 **書** 多宇末井之橋
書 身目集成子 津輕鎮 青森 身六
里許 濱手ノ山 陸野内 安佐 赤間
道ノ絶えし所より 出づる 板ヲ渡し 運
路ト丈夫ヲ今モタテ 井ノ橋ト云 此辺ヲ
惣テ外濱ト云 其内 廿丁許ノ向一重
身ニテ 石ノ架ヲ渡り 通ル 道アリ 者

樹存長

夏秋ハ山ノ上道ヲ 通路ス冬ハ雪深
キ故ニ北濱ノ難所ヲ 從來スレ渡シ
ノ是橋 浪ニ引ルニ 又次ニ 來ル 浪ニ 岩
山ト云 兼位ガ 籠レ 城ノ 散モ 今モ 城ル
ト云 菅田 蹟 遺 跡 向 田ノ 巻ニ 稱部
ハ今ニ 所ノ 跡ニ あり 文ノ 一ニ 稱部ノ 所
シテ 事 鑑 日 事 文治六年二月十二日
大河 太郎 兼 任 追 代ノ 多子 於 外
濱 此 稱部 向 有 多子 守 事 井 三 將

て出崎をくばりしもの上崎に紅
き杖くしきしめられしきされし
たのち此くしきしめられしき
美濃の片嶽の駒のまきくしき
信濃のまきくしきありしき
くしきくしきくしきくしき
善知鳥とていひしきくしき
あされしきくしきくしき
一創は極つと捕りしき

もろきまの何より此翔を
つと其くしきくしき
又鶴くしきくしき
尚委

世三 白拍子

平家物語一の巻に妓王のあま
朝之由拍子始りし事いふ鳥羽院
二名守之嶋千歳和歌前彼等
二人舞出たりは也始り水干三立

鳥帽子白鞘巻ヲサイテ舞ケレバ
男を舞トグ中ケル形ルヲ中比ヨリ鳥
帽子カラノケラシテ水干ニカリ用スリ
サテスリ白柳子トハ名付ケレタリ

④ 白杖

日一の巻其鹿岩の多子賀茂ノ上ノ
社ノ所寶殿ノ所後口ナル松ノ洞壇
ヲ立アル聖ヲコトテ此歳午ノ法ヲ百回
行ハセラレルコトヲ神人白杖ヲ持テ彼
聖ガウチシラシムケテ一倍ノ大路ヨリ南

ハオソクニテケリキ、梅子瓊をきけ
ニイボトシ、答杖ハ名ニ白杖とい
ハハオと云ハキ、ケト云
④ ゴツコシと云ハ、並ニ根
俗語子ゴツコシ知子居ルゴツコシ熊意
スルヤトシ、スハ、家物法一の巻也
鴉川合神の多子、根、賤キ下、囃
ナリと云フコト

⑥ 目代

目代ハ国司の目代モ、多國ノ下向

系之如也
目代ノ
義ノ多ク
種ノ多ク

目代（新様中記） 陸奥守家康印言の殿（龍目） 什方（龍目） ありとも昭（龍目） の件も国守（龍目） 兼
二五ノノ龍目（龍目） 見
一ノ目代とあ
二ノ目代の後所
三ノ龍目代の
四ノ龍目代の

国司治^一二後白河院^三より多世子
ハ國司京都市^四子居^五目代^六比^七下^八に
リ平家物^九渡^十師高加^{十一}賀守^{十二}と
り^{十三}弟の師^{十四}佐^{十五}目代^{十六}補^{十七}され
しとあり

② 娘ノの門火

娘ノ記ノ娘^一迎^二の^三と^四比^五する^六一^七門火
た^八く^九と^十比^{十一}する^{十二}一^{十三}今^{十四}七^{十五}一^{十六}去^{十七}ある^{十八}
佐^{十九}の^{二十}娘^{二十一}との^{二十二}門火^{二十三}と^{二十四}く^{二十五}一^{二十六}と^{二十七}あり

③ 乃がーの

乃^一の^二乃^三の^四乃^五物^六今^七佐^八の^九乃^十の^{十一}乃^{十二}の^{十三}乃^{十四}の^{十五}乃^{十六}の^{十七}乃^{十八}の^{十九}乃^{二十}の^{二十一}乃^{二十二}の^{二十三}乃^{二十四}の^{二十五}乃^{二十六}の^{二十七}乃^{二十八}の^{二十九}乃^{三十}の^{三十一}乃^{三十二}の^{三十三}乃^{三十四}の^{三十五}乃^{三十六}の^{三十七}乃^{三十八}の^{三十九}乃^{四十}の^{四十一}乃^{四十二}の^{四十三}乃^{四十四}の^{四十五}乃^{四十六}の^{四十七}乃^{四十八}の^{四十九}乃^{五十}の

④ 乃の異射者字

真言傳三の老 ^廿丁 ^{廿一} 懸 ^{廿二} 覺 ^{廿三} 大師の傳
子 ^{廿四} 毒 ^{廿五} 賊 ^{廿六} 十 ^{廿七} 余 ^{廿八} 人 ^{廿九} 三 ^{三十} 同 ^{三十一} 四 ^{三十二} の ^{三十三} 老 ^{三十四} 十 ^{三十五} 二 ^{三十六} 傳
正 ^{三十七} 真 ^{三十八} 雅 ^{三十九} の ^{四十} 傳 ^{四十一} 二 ^{四十二} 尊 ^{四十三} 勝 ^{四十四} が ^{四十五} 三 ^{四十六} 修 ^{四十七} 三 ^{四十八} 二 ^{四十九}
日 ^{五十} 下 ^{五十一} 海 ^{五十二} 山 ^{五十三} 妻 ^{五十四} 子 ^{五十五} 比 ^{五十六} 法 ^{五十七} を ^{五十八} 三 ^{五十九} 比 ^{六十} 三 ^{六十一} 比 ^{六十二} 三 ^{六十三} 比 ^{六十四} 三 ^{六十五} 比 ^{六十六} 三 ^{六十七} 比 ^{六十八} 三 ^{六十九} 比 ^{七十} 三 ^{七十一} 比 ^{七十二} 三 ^{七十三} 比 ^{七十四} 三 ^{七十五} 比 ^{七十六} 三 ^{七十七} 比 ^{七十八} 三 ^{七十九} 比 ^{八十} 三 ^{八十一} 比 ^{八十二} 三 ^{八十三} 比 ^{八十四} 三 ^{八十五} 比 ^{八十六} 三 ^{八十七} 比 ^{八十八} 三 ^{八十九} 比 ^{九十} 三

弘法大師の法華目録と海を無
二つより真佑籍記と醍醐寺の
圖をよむ

卅 醍醐寺

真言傳の卷 九丁 役優婆塞の付
二首 城金峰山の法是善薩の侍
土現身 流法ノ聖山也昔鑿真和
尚 唐土ヨリ本朝ニ来テ戒法ヲ弘
玉ヒシ 然野ニ參詣シテ十二月晦日大
峯ニ入テ是晦日山臥ノ始ナリ云々

今昔七十四
二後大証ノ
時

卅

ナシ 沙野。ツグシ。片方者。カハタシ
時。アシクシ。所。日ノクシ。

真言傳の卷 九丁 大信正實初傳子
或物衆云此信正仁和寺ノ破タレ所修
理セサセシトテアヤヒドモセテ書進具ア
マタツドヒテ造ケリ。日暮テ書進具者
出テ後今日ノ所作イテラヤリシタ
ルナド見テ思テ信正カエヒタシテ高足
駟ノキ杖ヲテ只独コノモトニ坐シキク
アヤヒドモセヒタルモトニ立廻テナクエフグ

レニ足ケル程ニクハミル儀来ルニル
鳥帽子ヲヒキテ顔ヲシカモ足ニ
テ僧ノ前ニ出来テツク井テカク
扱テ到カクシ先ヤウモテテ居
ハ僧ハ彼ハ何物ゾト問ケリ男カ
ラツキテワビ人ニ侍リ冥サノ
侍ル其著者ヲ見ル所ゾ一ニ
世ト思侍ルナリト云マニ飛
思タル氣色ナリレハ幸ニモ
奇ヲワアシカリ怒心ニケ
オトサト

モ其氣玉ハデケシカラヌ
ト云マニコナト立廻テ
ケレバケタル、マニ男ノ
道人ノ我術ヲ剽ニトシ
ムカリヌバケレハ尻ヲ
失ルナリ云々、
曰の者、
尻をつとけり。
おろし、
百世もかたきド

キ源氏まアレハタレドキ四半今昔子
ワケレシ万葉子北ノクシ今昔子カク
好レシワレシモコト

世三

のゆら。田づ
づ。の。る。づ。海づ。はら

真言傳其の考世一信正慈恩の傳
二唐シノ天狗心水テテク大高ノ有
都安ノ本心水登テ二人路ワラニ
居テリテテテテテテテテテテテ
海をツツテテテテテテテテテテ

文信子
多ラ多ラ
精進日記
好ノ本心
下ノ子
テ

目
世三

の書 世三 同傳子唐シノ天狗イニシ

ナル老法師成テ石ツトハノ傍
世三 同傳子唐シノ天狗イニシ
少コノテテテテテテテテテテ

世三 同傳

南田書とイハル南ノ有る田書集
世三 真言傳其の考好レシ成典の
傳子仁和寺ノ田書ニシテ行法ノ同
云々

大抵は能
用なきも其
事やあふん
ふまよふ事
堪裏ニセテ
指差
去隊のちや
まのほよこ
はのほよこ
はのほよこ
三議一統上テ

(廿五)

其名の濱口劫

後撰の事よむいけ
吾國の寛運金枝の勝相の事

國其子濱

歌子

真言傳七の鬼

大信の増興傳

國其者一番

キ其名在

(廿六)

弘法大師應天門の額

真言傳三の卷

桂弘法大師の傳

平安城大内

南西并諸門額書

給大所神

年唐家尚書并故也

應天門額

書云云額ラ門ニ付

テ後是ラ見ル應字上因點ラ書

落給ヘリ驚テ下ヨリ筆ヲ投テ點

打給萬人ニテ感嘆ス云々

(廿七) 國領

同七の卷 和覺鏡上人の傳子高野

傳法院等數箇寺ヲ造シ山下ニ多ク

國領ラ左号ニ是ラ寄進セラル末代布

特興隆也云々 國領ラ左号ニ管領ス

(廿八) 廿八

田舎人の詞の多きこと及びついで
とれどもガシヤウキとソリ鳥追
詞の多きあはれやうとむやう
女と云々とも由 注の大同類聚方の
炊^{カヤシ}春^{シヤシ}巻とあるは引の誤
鳥追詞の大初言ハ豆もあす大津
の護摩の杖門子張ことろを
① 引くつと
俗言のヒツツと云ふ詞ハ 嵯峨日記中

光 下子あまある人のあつと
つとら由 堀川願 在歌集あつとい
ゆつとと云ふなり

② 人間の皮地あつと 養生
舟内侍日記上巻 穂人あのはを
あつとちくまをうとをうまの人は
んとあがりしつ

③ 醫の
時そのと世田岩 勝光院 皇師 縁
起子 室のさう 拾三方石のらま世田

岩所市西三位吉良左兵衛佐治新原
白かほり子内務子ほしきおぢ
石とく白簪の戒すたるは二子の御
是地より一うぶゆき御方の侍にまじ
踏込抱きとくくきい足子一音の歌を
あしはる

まづお方のことあはれおのきるまへ
まねの床みくらやきんがとめんあ
りはるお原の内海ありてあまのこ
みお原一矢一比歌は白裳也

ゆいん花踏込内晩ありて踏込は
まのまおちえけりお原の内海ありて
一しりけんこの踏込其を母子埋るを
お原の内海ありてお原の内海ありて
年のまねるる花踏込は地づ子
りまろくささそのまけりてのま
白くておちえけりまのまのまのま
おち回ちまのまのまのまのまのま
お原の内海ありてお原の内海ありて
あしはる。けなせのまけりて

上すまいし〜お内流を〜と
日年卯月申ひまのあけはくも
なみ月後の人さる田中らあ周防
上野介大場為馬さわや〜
大平出羽さう電〜いせもあえまの字
切地はら〜り白踏び〜
清り〜生さ〜子あ〜い〜まのあ
まよふと〜もあ〜る今のせま〜
ま〜の國あ〜のあ〜いあ
踏地のあ〜い〜あ〜あ〜

ま〜こと〜あ〜い縁起を記〜
正三位とあら〜ま〜い〜
踏地のあ〜い〜あ〜い

③ 籍役

水 流中巻付紙と〜のあ〜ん〜
〜ま〜あ〜い〜あ〜い
さ〜あ〜い〜あ〜い
ま〜籍役牛〜あ〜い〜
位馬り〜あ〜い〜

④ あかつ〜

異名
お宿三の
二籍役ノ
空車

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account. The text is written on a single line across the top of the page. It includes several words and numbers, such as "100", "1000", and "10000".

Handwritten text in a cursive script, consisting of several lines of text. The text is written in a fluid, connected style. It appears to be a list or account, with some words and numbers. The text is written on a single line across the top of the page.



